

民俗芸能・近代と変化

佐藤 恵里・佐藤雅子
橋本裕之・高橋秀雄（司会）

報告

俄（にわか）の場合

佐藤 恵里

シンポジウムの「民俗芸能・近代と変化」という題は、伝承芸能の様態が地域社会の「近代」によってどう変化したのか、つまり「近代」が芸能に及ぼす力の如何とその要因に対する問いかけになると思われる。しかしこのタームとしての「近代」は私などには難解なので、ここでは普通いわれる明治から昭和20年敗戦までの時代区分と措く。そのうえで、近世中期（18世紀半ば）から八幡宮の祭り（現在10月10日、もと8月15日）の芸能として獅子（獅子舞）とともに行なわれてきた室戸市佐喜浜町浦の俄の歴史の変容について、俄の様態・内容とこれを管理してきた若者組織の両面から報告したい。あらかじめ結論らしきものを述べれば、近代よりむしろ昭和30年代に地域社会を襲った過疎化が変化の要因となり、組織は大きく変貌するが、管理主体は相変わらず若者であり、俄の様態も従来からみれば変化したもの、内容を支える根幹ないし精神においては近代を経てなお変わらないということになるだろうか。

組織について

佐喜浜町は総面積約6490ヘクタール、うち林野が95パーセントを占める広域な町で、海に面した町場の浦を中心に行政区画からは10地区になる。従来海運漁業の浦に対して、中里、船場など農林業の山麓部集落を郷と総称し、この郷浦に近世では枝村といわれた尾崎・入木等が加わって、およそ郷分浦分の分担で「佐喜浜郷浦総氏神」である八幡宮の祭りを運営してきた。この分担制も過疎化によって変質したが、なお郷が供物の用意や神輿昇き等を担い、浦が「お船」（千石船を模した船山車）・獅子・俄という神賑わしの奉納芸を担う。

浦ではこうした芸能とともに祭りに関わる諸行事を管掌したのが近世「浦若者」と号した若者集団であった。浦若者の後身の浦青年会が昭和62（1987）年に解散し、その下部組織の四宿がこれに先立つ昭和42年に崩壊して浦宿に統合されてなお、「祭りは若衆のやること」とは今だに年寄りから大きく言である。

四宿は半之丞宿・西宿・中宿・南宿という若衆宿で、文献上延享元（1744）年以前の成立とみられる。その経緯はなお不明ながら、最も古い宿として古格を保った半之丞宿の創始者で俄奉納を始めたと伝える井筒屋半之丞が元禄・享保期（1688-1735）に栄えた廻船問屋であることから、泊り若衆や若者仲間を核に祭りの芸能奉仕を主要な目的として組織されたものではなかったかと考えている。

この宿は常時の寝宿でなく、祭りにあたり、トーヤとして各々の「宿元」となる民家を指す。若者はおよそ宵宮の二日前からここに「宿入り」し、祭り明けの浦祭りまで「こもり」、共に寝泊りして浦分の行事遂行のために働く。宿入りはその年の祭りに15歳になる少年から20代後半ないし結婚の決まった若者の義務で、彼らは親兄の属する宿に入る。初年度の宿入りから「宿抜き三年」と呼んだ「お礼奉公」の期間を経て、宿抜きが公認されるまで、毎年宿入りし、「若衆のつとめ」を果たさなければならない。これを経て一人前の浦人となり、浦の人間としての権利と義務を有するので、宿入りは浦が若者に課した通過儀礼であった。

「出水主（でずいし）」と呼んだ浦以外から転居した者も、若者のような実働こそ伴わないが金銭を出し、籤引きによって属する宿が定められる

という宿入りの承認を必要とした。戦前までの若者は「宿入りすれば、出役に出て一人前の賃がもらえた」と伝えるように、四宿は浦地下の村入りを管理・承認する自治組織として機能していたことになる。

宿入りは「地下のしきたり」であり、宿入りしなければ絶交処分を受けたことが近代の宿規約等からわかる。若者の場合、絶交は当時「大宿」ともいった青年会と連動し、若者個人のみならず家族に及ぶ。つまり、村八分で、この強制力は昭和30年代初頭まで続いた。家を基盤に宿組として同族意識を培った四宿は若者を中心に浦という地縁社会の共同体的性格を構成したのである。

さて、宿若者は宿抜き後の宿老の下にあって兄若衆・小若衆の厳格な階級制のなかで帳方を中心に働く。四宿の帳方を統べるのが「大宿の帳方」ともいった青年会の会長であった。若者の働きは祭りの出し前金を宿組の家々から集金するのを始めとして、宿老級があたる「役持（やくもち）」（警護・鳥毛持ち・宮籠りの三役のこと）の世話をしたり、竹伐り・注連張りなどの準備や宿老らの酒宴の奉仕と祭り万端に及ぶが、なかで俄の作成・稽古と「付け届け」の儀が四宿共通の若者主体の行事であった。宿財産を管理運営し、会計の責任者の帳方は宿老を客とする酒宴費の一方で、若衆に飲ませ・食わせる「若衆養い」の捻出が腕の見せ所とされていた。俄の稽古もこの若衆談合の饗宴のなかにあった。また付け届けは小若衆や出水主の宿入りの承認を他宿に求める、兄若衆の技量が問われた式である。

俄に要する人員は役者とフレコミ（口上役）・拍子木・オボン持ち（オボン（台本）を持って役者にセリフを付ける役）で、作は宿老を作者として頼むか若衆の合作によった。役者は宿入りしたての小若衆が中心で、フレコミ以下は役者を通った兄若衆の任になるのが慣例である。宿入り当初の思い出が「こきつかわれて俄して」に収束するところに、この慣例の重さがあった。

祭りの日、浦の家々は特権として参道両側に棧敷を構え、酒宴のうちに眼前を渡る神輿を拝し、獅子・俄を見物するが、俄では初めて役者で出る小若衆をみて、「もう宿入りか」とその若者成りを祝った。俄は浦において宿入りという元服を証だてる成年戒の式としてあった。小若衆はこうして若衆の承認を祭りのハレの場で受けた後、大宿の一員となり、愛宕さんの奉納芝居や盆踊りなどの年中行事に参画すると同時に夜警・消防など町の自衛力となって働く。宿入りと俄の役者を契機に浦若者として認知されていたのである。

その変容

42年の浦宿一本化は30年代後半から宿間で起

こった議論で、宿老に向けた若者側の提案であった。それは「若衆が少ない」という宿入り人数の減少と地域社会の意識変化による。敗戦を境に軍国主義から一転して民主主義が天下った戦後20年代はこれを伝家の宝刀に自己主張する若者が増えたが、祭りの時は「昔の気持ちに戻って」宿行事に従事し、宿老に仕えていたという。しかし、30年代後半に始まる高度成長期から、宿若者の中で宿老に反抗したり、宿制の前近代性が言挙げされ、また宿入りを始め宿行事が形骸化して、祭り自体が「人が来ん」ためにさびれていく。出水主は有名無実となり、宿老は宿の宴に参加せず、宿入りを経た親が学校を大儀に掲げ息子の宿入り拒否を正当化する。もはや戦後ではないと謳われて、都市化する産業構造や家庭電化時代の到来で、地域社会が生活の事実としての宿の存在根拠を見失い、自ずとその意味を否定していくのだが、この背景には急激な過疎化が一に考えられなければならないまい。

34年の室戸市合併当時、佐喜浜町の人口は4337人、これが40年には3317人で、この間1000人が減じた。県の人口も40年までの5年間で42000人減じている。佐喜浜の場合40年の前後に、大正5年3166、昭和15年4029、さらに45年2961という数字を配すれば、高度成長以後の地域の衰退が明らかであろう。その人口減の主層である職を都会に求める若者の大幅な流出によって、「戦争なら（出征して）戻る可能性があるが、今は骨も帰らない」という喪失感を共同体の崩壊のなか、地域は身をもって体験することになった。

さて、四宿を廃して浦宿の名の下に一本化したのは獅子と俄という宿行事の中心の芸能を存続させるための措置である。宿は浦のしきたりで家筋に限られるので、これを取り払えば、浦以外の集落から若衆をその要員として「連れてこられる」。従来若者と娘の憧れであった獅子は中宿の専有で、中宿以外の者が頭に触れようものなら叱責が飛んだが、この獅子も宿さえ壊せば「誰でも使える」。四宿の解体は伝統継承のためのもので、芸能の浦以外への開放でもあった。

一方、浦宿は名目のみの宿で、宿元のトーヤは統合後もなく立ち消え、長く若者を律した宿入りも自然と消滅した。漸次若者は会計権から離れ、芸能をのぞいて従来の仕事は常会（町会）委員の手に移る。この間の経緯を体験者は「祭りのエライテが若衆から浦区長へ変わった」と総括する。祭り行事を仕切った帳方から、その権限が浦の町組を統べる区長へ委譲されたという。本来区長は、「祭りは若衆のやること」ゆえに、行事に関わることはなかったのである。

浦宿以後20年を経て、これも「若衆がいなくて愛宕の芝居ができない」ゆえに青年会が自然解散

した。近世以来の若者集団がここに終息したわけだが、現在なお獅子と俄は若者が掌握している。それは四宿が崩壊していく30年代後半から40年にかけて宿入りといっても宵宮のみの泊りを経験した組が「上の者にならい、下の者を」時に「張り回し」ながら、自分たちがそうしてもらったように、躡けてきたからである。民俗学の通常分類に従い、公的性格の強い大宿・四宿を若者組とみれば、浦宿時代の彼らはその原点に帰った私的寄り合いの若者仲間ともいえる。芸能というハレの行事が自分の代で廃絶してしまうのを身体が忌避するところに浦若者の心意の継承がある。

俄の側から

四宿時代と比べると、浦宿以後の俄は様態のうえで種々変化を遂げた。四宿時代、各宿は毎年最低2本の新作を用意し、籤引きによる順番に従い、旅所の浜宮と還御後の大宮（八幡宮）で演じた。大宮では4台の山車が喧騒のなか轟いていた。浦宿以後、新作2本の線は堅持されているが、当然ながら宿間の競いあいが消え、最後に一同でいう「これが俄じゃ」の掛け声もいつしか忘れられていった。フレコミ・落としの言い方など各宿の流儀とともに、半之丞・西宿は仕打ち（所作）に力点を置き、南宿はエロチック、中宿は政治的といった作風も自然淘汰されていく。祭り当日の稽古に各宿が俄宿札を出して借りていた俄宿の習慣も消えた。なかでも台本の保存は長く宿の帳方の書類管理の一環で、代々「後の者のためにつとめとして」残してきた。それは再使用のためというより、俄が奉納できない非常事態の想定による。浦宿以後は基盤の消滅から管理主体が曖昧となり、散失も多い。

変わらないのは、小若衆を役者にあて、俄の素材とし、且つ「俄をして一人前」という伝統の心意が地域の実感としてあることである。この地の俄は他と同様落としを俄の生命とみる。その落としは落としを引き出す「押し」役とそれに応じる「落とし」役の間答からなるので、役者が2人いれば俄として成り立つが、四宿時代は3人以上を堅持し、押し・落としをすでに役者を体験した者の役としてきた。つまり、宿入りしたての小若衆のために両役以外の役を設ける。浦宿以後小若衆は呼称を「高校生」に変えるが、兄若衆・宿老の

立場にある者はこのため日頃から「高校生を飼うちよく」。かつて帳方が「若衆養い」に努めたように、飲み食いさせて目を掛ける。「慣れた者がやるとごつうなって俄ではない」という評言は伝習のもので、荒物の若者がやってこそ俄という美意識は彼らの行動のうちにしかと継承されている。

現在も稽古は宵宮の夜半からと当日の朝に限る。四宿時代のように、宵宮に集う者の中から役者が決まり、この時台本が初めて手に渡る「俄立ての芝居」になる。オボン持ちなども兄若衆の顔触れからその場で定まっていく。稽古は時間にして6時間ほどである。稽古が過ぎると「芸が錬磨になり、俄がうさる（失なわれる）」といった。時間をかけて上手になると、俄ではなくなってしまうのである。

この地の俄の特色は新作を旨として、地域の出来事や社会の最も新しい話題を直截に取り上げ、人物を実名で出すことにある。この「齒に衣着せず、ずばりという」を俄の精神に求め、若者たちが自恃としたことは近代の台本からも証せられる。鬼畜米英の戦時中にはルーズベルトやチャーチルが戦勝祈願に祭りの日の宮を訪ずれ、時の浦区長なり色娘のオサセと悶着を起す。これが現今では橋本首相や麻原彰晃となるので、自分たちの現在する地域が発想の原点であるのは変わらない。

俄は「祭りの冗談事」であり、なお、「若衆のやること」である。その内容に「文句を付けよったら笑われる」という観念は浦における浦若者の権限から培われたものだが、若者集団が解体しても、俄は風刺する制裁力と見物と共に祝おうとする祝言の力において、一つの運動体として地域社会に確実に機能している。それは、古い様式によって当座の新鮮を企てる俄という芸能が、浦の若者の躰から躰へと移されてきた行動伝承の力とあっていいかもしれない。

参考＝筆者編『室戸市佐喜濱町俄台本集成Ⅰ』（平成2刊）、『室戸市佐喜濱町俄台本集成Ⅱ』（平成7刊）。ともに佐喜濱八幡宮古式行事保存会発行。

*1997年度春季第43回舞踊学会『舞踊學』20号より転載